

情報共有

非管理メモ

NISA 課長

官邸 課長

— 官庁連絡課

4枚

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 7 月 24 日 (日) 11:00~11:40

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 30 名 (カメラ 3 台)

当方：原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所プラント関連パラメータ (7月24日6時現在)
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果 (7月24日)

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 1号機原子炉圧力容器底部の温度が100℃以下で安定しているが、低下傾向にある理由は。

A. 1号機に関しては2, 3号機と比較して温度は低下傾向にある。基本的には注水量に応じて決まってくるが、現在は多めの水を注水している状況である。また、崩壊熱が時間とともに低下していく傾向にあり、流量が変化しなければ温度は低下していくことになる。なお、1号機は今月上旬に流量の低下傾向を確認しているが、その際に3.5m³/hに流量調整している。

Q. 原子炉への注水量を増やしたことが圧力容器下部の温度低下に繋がっているという理解でよいか。

A. 1, 2号機については注水流量が低下傾向にあった際に流量を多めに調整したが、その際に流量増加とともに温度も低下傾向にあることを確認した。流量と温度の間には関連があるものと考えている。

Q. 1号機の注水流量は増加させた流量を維持していくのか。

A. 当面は流量を変化させる予定はないが、ステップ2の冷温停止の見極めの際に必要な精度の高い内部温度の把握、水処理設備の安定運転の度合い等を踏まえて検討していきたい。

Q. 海江田大臣が、「線量計を置いて作業にあたった作業員を誇りに思う」、との発言をテレビ番組で実施しているが、線量計を意図しておいた作業員がどの程度いるのかを東電として把握しているのか。

A. 大臣の発言自体は承知しているが、そのような事実は把握していない。地震発災直後は1作業グループの代表者に線量計を渡して同一の作業を実施した作業員はこの線量計の値で代表する運用を行ったという事実はある。

Q. もし事実だとすれば、労働安全衛生法上問題になる話かと思うが、今後東電として調査する予定はあるのか。

A. 検討させていただく。

Q. 過去に線量調査を行った際に、今回のような事実もヒアリングは実施しているのか。

A. そのようなヒアリングを実施していない。

Q. 1、2号機の原子炉への注水量は一時期低下傾向であったとのことだが、7月17日にポンプを変えて以降の最低流量は $3.2\text{m}^3/\text{h}$ ということによいか。また流量低下の原因は分かったのか。

A. 2号機で7月23日に $3.2\text{m}^3/\text{h}$ を確認しており、その後 $3.8\text{m}^3/\text{h}$ に再調整している。設備に異常は確認されていない。引き続き、パラメータを監視していきたい。

Q. 1号機の注水量は $3.8\text{m}^3/\text{h}$ が目標値ということか。

A. $3.5\text{m}^3/\text{h}$ で十分と判断している。

Q. 流量が不定期に低下することは問題ではないのか。

A. 現時点で設備的な不具合はない。流量についてはかなり弁を絞った状態での調整になっており、少しの流量変動がきいてくる状態である。日々流量を監視をしながら、必要に応じて調整していく必要があると考えている。

Q. 注水流量を増やす方法は。

A. 弁の開度を開いて、流量を増やす。警報が発生している場合は、警報をクリアにして、弁の開度を調整しながら目標の流量にあわせることになる。

Q. 警報が発生する流量は。

A. 1号機は $2.5\text{m}^3/\text{h}$ で設定しており、前回警報発生した際には $3.0\text{m}^3/\text{h}$ と安全側で発生した。

Q. 冷温停止の条件として、圧力容器下部の温度が 100°C 以下に安定することを確認することだが、圧力容器上部は条件に入れなくてもよいのか。また水温を見る必要があると思うが、何か確認する対策はあるのか。

A. 原子炉全体が 100°C を下回ることをどのように確認するのか、ということになるが、通常は水温で判断するが現状をふまえ圧力容器下部で判断することとしたもの。今後、冷温停止の判断基準に関しては整理が必要だが、燃料は容器下部にあるものと想定し、圧力容器下部が 100°C を下回ることが重要と考えている。

Q. 圧力容器下部は少なくとも 100°C 以下であり、その他全体の温度把握できる範囲で温度が低くなっていることを確認できれば冷温停止となるのか。

A. 温度計の信頼性も検証する必要があるが、基本的にはその理解でよい。

Q. 水処理設備に仮設ホースを設置する予定になっているが、工事の最新の進捗を教え

てほしい。またスラッジが再度詰まった場合の対応は。

A. 現在ホースは手配中であり、工事のスケジュールは未定である。スラッジが付着するメカニズムは検討段階であり、またスラッジが流量低下の原因であること自体もまだ確認できていないので、まずはその確認を行いたい。仮にスラッジが流量低下の原因と判断できれば、スラッジの付着しにくい配管の採用や新しい配管と交換する、といったスラッジが付着した後の対策について検討を行う予定。

Q. 稲わら問題について、マスコミ報道を見ていると汚染牛肉は長い間食べ続けなければ影響は出ないとの考えが散見されるが東電としての考えは。

A. 基本的には同様の見解であると考えている。

Q. 稲わら問題をはじめ、放射性物質が付着した農作物等により、畜産農家、食肉業者、消費者等、すべてが補償対象になると思うが、どのように考えるか。

A. 稲わら問題については社会の皆さま、地域の皆さまにご迷惑をおかけし、大変申し訳ないと考えている。補償については、国の紛争審議会の見解を踏まえ、対応させていただきたい。

Q. ジャーナリスト [] とルポライター [] が勝俣会長、清水前社長等に刑事告発をしたがどのように考えるか。

A. 刑事告発なので、訴状を見られる状態でない。当社としてコメントは差し控えさせていただきます。

Q. [] のホームページに訴状がアップされているのでコメントをいただきたい。

A. コメントは差し控えさせていただきます。

Q. 水処理施設の仮設ホースの設置について、設置場所、線量対策等の検討状況は。

A. 現場の雰囲気線量は50mSv/hと高線量である。これは、仮設ホースを取り付ける当該配管ではなく、平行して敷設されている油処理システムを通過した後の配管によるものである。当該配管の取り付け場所等については検討しているところ。

Q. 配管内のスラッジが流量低下の原因の可能性とのことだが、スラッジはどのように処理していくのか。

A. 今後、スラッジの性質等を分析した上で検討してまいりたい。

Q. 作業員の被ばく線量の基準について、事業者からNISA、厚労省に対し、2回ほど引き上げるよう要請した事を確認している。本件について厚労省としては公表し、NISAは今後公表予定とのことであるが、東電からの要請文も公表いただきたい。

A. 書面があるかどうかも含め検討させていただく。少なくとも年間50mSvの緩和要請はしていない。

Q. サリーの最新の設置状況を教えていただきたい。

A. 現在、配管工事や検査工事を実施しているところ。吸着塔の搬入据え付けを今月の下旬から来月の中旬にかけて数日間で実施し、通水試験を実施した上で運転を開始したい。

Q. 構内に運び込む詳細日取りを教えてください。

A. 細かな予定については確認させていただく。

長から 1号機の流量調整について口頭でお知らせ
・ 11:00 3.3m³/h に低下 → 11:10 3.8m³/h に調整

以上

情報共有

4
#枚 (非管理メモ)

官邸、NISA班 ← プレス対応チーム

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 7 月 24 日 (日) 17:30~18:25

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 30 名 (カメラ 4 台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

原子力運営管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (水位・圧力・温度などのデータ)
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析結果について (第百二十一報)
- ・ 福島第一原子力発電所の海水からの放射性物質の検出について (第百二十三報)
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれる放射性物質の核種分析結果について (7 月 23 日採取分)
- ・ 福島第一原子力発電所構内における土壌中の放射性物質の核種分析の結果について (続報 25)

より配付資料に関して説明。

より冒頭、午前中の会見での「海江田経済産業大臣のテレビ番組での発言について、今後事実関係について調査する予定はあるか。」という質問に対して、「本件に関して、現時点では調査の必要性はないと認識している。今後も福島第一原子力発電所内での作業には、元請企業とも協力しながら、放射性教育をはじめとした適切な放射線管理を実施してまいりたい」と回答。

質疑：

Q. 海江田経済産業大臣の発言について、調査をする必要がない理由は。

A. 発災以降は、線量計の数が不足していた時期もあり、1 グループの代表者が 1 つ持って測定したりしていたが、現在は、線量計の数も十分にあり、しっかりと放射線管理をしていると認識している。そのため、新たに調査する必要はないと考えている。

Q. 海江田経済産業大臣は、線量計を置いていったと発言しているが、そのような事実を把握していないということか。

A. 当社として、意図的に線量計を置いていったという事実は把握していない。いずれにしても、事故直後の放射線管理を反省し、適切に放射線管理を進めていく。

Q. 本日の水処理設備が再開したということだが、詳しく教えていただきたい。

A. 水処理設備の下流の淡水化装置が 9 時 40 分に再開し、パッファタンクへ淡水化され

た水の移送を 11 時 27 分に開始し、現在も運転を継続中である。

Q. 明日、T-Hawk によるダストサンプリングの結果を公表する予定という理解でよいか。

A. 7 月 22 日 2 号機原子炉建屋上空、昨日 3 号機原子炉建屋上空、本日 1 号機原子炉建屋上空のダストを測定しているが、とりまとめて明日にもご説明させて頂きたいと考えている。

Q. 先日ステップ 2 における敷地境界周辺での被ばく線量の目標値として 1.7mSv/年との値を示した際に、建屋内部からの放射線量をシミュレーションにより評価しているが、今回測定したダストサンプリングのデータはこのシミュレーションの一部として活用するのか。それとも別に使用用途があるのか。

A. 19 日の会見時にお伝えしたが、風向によって敷地周辺のダスト量に変化がないことから、発電所から風に乗って放射性物質が移動する量は少ないと考えているが、原子炉から放出される放射能の量を測定する手段として、発電所西側のダストを測定した。値としては、地上からの舞い上がりもあるものの、全て発電所由来と考えて評価した結果、10 億 Bq であった。今後、発電所周辺のダスト濃度を測定することで、今回試算した放射能線量の精度をあげていきたいと考えている。

Q. 明日公表予定のダストサンプリング結果を用いた評価はこれからということか。

A. その通り。ダスト量のみでは正確な評価は難しく、線源や風量等も考慮し整理していく必要があるが少し評価に時間がかかると考えている。

Q. サリーの設置工事の日程について、最新状況を教えてほしい。

A. 現時点ではサイトに搬入する時期が不明確であり、確定次第ご連絡させていただく。

Q. 本日 1 号機原子炉への注水量が 3.3m³/h に低下したとのことだが、この理由は。

A. 設定流量である 3.5m³/h は、ポンプ容量からすると非常に低い値であり、安定させるのは難しいと考えている。ただ、バルブを調整することで流量は調整できていることから、弁あるいはポンプ側に不具合はないと考えている。1, 2 号機については所定の 3.5 m³/h、3 号機については 9 m³/h を継続して原子炉に注水することが重要である。

Q. 配管のエアだまりが流量低下に影響を与えることもあるのか。

A. 配管側の圧力損失が変われば流量が変わるが、その原因として空気の巻き込みやスラッジの影響等は考えられる。

Q. ■■■■■ の自己紹介と地震後の対応について教えてほしい。

A. 機械出身である。3 年前より本店原子力品質・安全部に在籍し、この度、日曜日については会見の対応をさせていただくことになった。地震発生以降は、復旧班や情報班等には属しておらず、最近の状況では関係各所にご説明をさせていただいた。

Q. これからの作業の中で一番の課題としてとらえていることを教えてください。

A. ステップ2の目標としては、より安定的に冷却し冷温停止にもっていくことと考
えている。放射性物質の放出量を低減し、避難されている方々にご自宅に戻って
いただくことを実現することが当社の使命と考えている。

Q. これまで[]が広報担当を実施していた理由は、

A. 4月より対外的な説明については連続性が必要とのことから松本が本部長代理に
任命され、対外的な説明を担っていたが、この度、日曜日および松本に不測の事態
が発生した場合の対応としての対外的なスポークスマンとして任命されたと認識し
ている。

Q. 4号機支持構造物は8段目の準備にとりかかっているが、完成目処は

A. 詳細日程に関しては確認させていただく。明日はコンクリートの打設準備を行う
予定。

Q. 原子炉への注水量が目標流量を下回る状況が発生しているが、問題が無いと言え
るのか。

A. 流量が減少していることを検知する、あるいはポンプ等が停止した後の備えが重
要と考えている。現在は、バックアップ用のポンプあるいは消防車による注水が実
施出来るように体制を整えており、仮に流量が下がったとしても、注水が中断しな
いためのバックアップはある。

Q. 原子炉注水量はこれまで低下する事象が発生しているが、今後極端に流量が減る
こともありえるのか。

A. 現在設定している $3.5\text{m}^3/\text{h}$ の値は、残留熱を除去するために必要な流量に対し
て十分に余裕がある量である。仮に流量が半分になることがあり得たとしても、短
時間であれば問題ないと考えている。

Q. 今回使用している炉注水用の流量調整バルブが、構造上小流量の設定が困難であ
るということを設計段階で想定していたのか。また、今後小流量に適した仕様のバ
ルブに変える可能性はあるのか。

A. 主に弁にはグローブ弁やゲート弁の2種類あるが、前者は開度が微細に調整可能
であるが、後者に関しては全開と全閉の制御しかできない。低い流量での調整が困
難であるとの認識である。現在使用している弁はおそらく流量を調整しているので
グローブ弁を採用していると思うが、詳細な仕様については確認させていただく。
本件に関しては問題意識持っており、よりよい案が出来れば改めてお知らせさせ
ていただく。現時点ではバックアップもあるので安全上の問題はない。

Q. これまで[]が自治体への説明を実施されてきたとのことだが、これは福島
県に対して実施したのか。

A. 福島県に限らず、地域のマスコミの方や、県主催の委員会等、地域の対応を実施
してきた。

Q. 本部長代理になったのはいつか。

A. 本日。

Q. 土壌分析結果においてテルル 129m が検出されているが、この理由は。

A. 3月28日、30日時点では10の5乗オーダーで検出されていたが、本日も報告した値は10の4乗オーダーであることから、半減期から考えると順調に値としては減少しているものと想定している。

Q. 核種分析の検出限界の具体的な値は。

A. 測定の目的により検出限界値は変わってくるが、今回の測定におけるヨウ素 131、セシウム 134、137、テルル 129 の検出限界については確認させていただく。

Q. 検出限界の大体の目安はないのか。

A. 今回土壌で検出された10の4乗オーダーであれば、検出限界に近い値と考えている。

Q. 今回検出された値は検出限界に近く、これ以上低くなると検出限界値を下回るという理解でよいか。

A. 検出する目的にもよるが、測定時間を長くしたり、試料量を多くしたりすることで、検出限界の値を下げるのが可能である。今回の土壌の分析においては、現在実施している測定方法で目的を十分に達成していると考えている。

Q. 目的を達成しているとは具体的にどういう状況なのか。

A. 法律で定められた告示濃度と比較して、十分に低い値を確認できればということ。目安としては1桁程度低いレベルである。

Q. 今回の土壌の分析結果でも1桁程度低い値を目標値としているのか。

A. 土壌に関しては告示濃度が定まっていないため、海水や大気の測定条件と同様のレベルで測定を行っている。

以上